

## 死の黙想

四世紀のギリシアの厭世詩人パラダスの小詩に次のようなものがある。（Polla laleis, anthrope——Palladas）

「君はあまりに饒舌だ、人よ、まもなく地下に眠らんとするに。  
口を閉じよ、君は生きている時にこそかの死を考えよ。」

これはとても面白い話である。死に関する問題は、わたしも何もする事がない時に黙想したことがある。（樹下ではなく、大抵は車の上で、）しかし何も考え出せなかった。——これはわたしが「楽天的詩人」であるせいかもしれない。しかし実際わたしは、曹慕管君のように、死を崇拜などしたことがあるだろうか。だがわたしはあまり死の神秘を感じることができない。だから十日十夜も思索する必要を感じないし、形而上の面でも饒舌に語るものを持つことなどできないのである。

窃に世人が死を恐れる理由を察するに、自ずと様々な違いがあるが、「愚を以て之を観るに」三項に決めることができる。その一は死ぬ時の苦痛を恐れる、その二は人の世の快樂を捨てがたい、その三は家族を顧慮することである。苦痛は死よりもまだ怖い。これは実際の事である。十年余り前遠い親戚の伯母がいて、とても困窮して、十二月の末に川に身を投げて死のうとした（われわれの田舎では川は冬中凍らない）、しかし彼女は身を投げたが、すぐに這い上がってきた。水があまりにも冷たかったからと言うのだ。彼女のことをバカだと笑った人があるかもしれないが、だがこれは却って本当の人間的感情である。もし誰かが、某生物学者の言うように、猛獣に食われて死ぬのは痒いところを搔くようにとても愉快だということを確実に保証できるなら、きっと多くの人が食糧を包んで山に入り餓えた虎に身を投げ与えるだろうと思う。残念ながらこの点は担保できないから、他の事ではもうなんの未練もない人でも、このためにいささか躊躇せざるを得ないのである。

家族を顧慮するのは、恐らく死を恐れる理由の中でも比較的小さいものだろう。というのはこれにはまだ救う方法があるからである。将来いつの日か、社会制度が少しく改良され、優生的節制が行われるほかには、みんな老幼を問わずそれぞれができるところを尽くし、それぞれが必要とするところを取ることができ、およそ普通の衣食住、医薬・教育がみな公によって供給され、それ以上のもっとよい享受は個人自身の努力によって獲得されるならば、そうした顧慮はなくてもよく、夜の夢さえもきつとずっと平安になるだろう。だがわたしの言うのはもともと空想で、実現は幾十年の後か分からない。しかも結局のところ必ずしも実現するのかどうかとも分からない。それではこれも終には遠水は近火を救えずで、何の役にも立たない。比較的確実な方法はやはりなんとか金を儲けることで、そうした憂慮を救うことができる。安閑とした死を得るために金儲けをするのは、とても高雅な俗事である。ただ金儲けはとても容易ではなく、われわれ誰もがやれる事ではない。まして天下の金持ちは銭を持つとかえって死なないから、この方法もすこぶる危険である。

人の世の快樂は自ずととても執着しやすいものであるが、これはただ青年男女にして深切に感

ぜられるようで、われわれのような「不惑」に近い人間は、凡人の苦楽を嘗めたことがあるが、このほかに別に皇帝になろうなどという野心はないから、まだ捨てがたい快樂があろうなどとは思わない。わたしの今の快樂はただ暇な時に一杯の清茶を飲み、新しい書物を読む、（近頃政府がわれわれに替わって貯蓄をするので、手元には茶を買う金しかないけれども、）それが虫や鳥の歌唱を述べたものであれ、あるいは賢者哲人の思想を記したものであれ、古今の雕刻絵画であれ、いずれもわたしが人生の幸せを感じるには十分である。しかしながら友人がやってきてもやま話をする時には、書物は置く。まして「無私の神女」(Atropos)の命令とあらばこそである。われわれは路上にたくさんの乞食が、皆すでに生きた人間の楽しみもないのに、苦しみながら生きようとするのを見れば、快樂が必ずしも死を恐れる重大な理由ではないことがわかる。あるいは捨てがたい人の世の苦しきも人をこの塵の世に恋々とさせるに十分なかもしれない。彼ら乞食のこととなると、実はすでになんの心残りもなく、大いに「来るも去るも自由」なのだが、実際にはそうもいかない。もし上に述べた理由のためではないとすれば、きっと川の水が骨に徹する北風よりももっと冷たいのを恐れるためだろうか。

「不死」の問題については、どんな意見があるだろうか。少年の頃五六年水兵をやって、頭に多少とも唯物論の影響を受けたので、「不死」という観念は起きなかったように思う。わたしはとてつて荒唐無稽の神話を聞くのが好きなのだけれども。たとい神話の物語が述べるようだとしても、ああした不老長生の生活は少しも好きではない。冷え冷えとした金門玉階の建物に住んで、五香牛肉のような麒麟の肝や鳳凰の干し肉を食べながら、毎日ぶらぶらする事もなく、松の木の下で碁を打つのでなければ、金童玉女とふざけ合うなどしたら、なんの趣味もない。まして永遠にそうだとすると単調かつくたびれてしまうだろう。また人の話では、仙人の時間は凡人のそれとは違うということだ。詩に「山中まさに七日、世上已に千年」と云うから、爛柯山下の六十年は碁局のそばではたったの一時間でしかない。どうして日永の感があるだろうか。しかしわたしから見れば、仙人が二百万年生きたとしても人間世界の四十の春秋にしか当たらない。このように時間を浪費するばかりで実際に無益な生活は、まったく心根すり減らして求めるには値しない。もし二百万年後に劫波がやってきて、そこで忽ちお終いとなるのであれば、五十歳の凡夫に笑われるだろう。少しいいのはやはり西方の鳳鳥(Phoenix)のやり方で、五百年生きると、蛻化して、幼鳥となる。このような輪廻はとてつて面白い。——残念なことに彼らはこの一家だけで、他人は真似できない。たぶんわれわれはやはりこの許された時間の中で、この平凡な境地にあつて、いささかの安閑と悦楽を求めることができさえすれば、それが無上の幸福なのであろう。「死後は、いかん？」という問題に至っては、それは神秘派の詩人の領分であつて、われわれ平凡人が仙人になったり亡魂になったりすることにいずれも関心がないように、それについては自ずとなんの興味もない。(民国十三年十二月)

※初出：1924年12月22日『語絲』第6期